ヒューマン・ケア研究　第12巻　第２号
2012年２月　98-108頁

Journal of Human Care Studies Vol. 12 No. 2
February 2012, pp 98-108

原　著

子育てレジリエンス尺度の作成

尾野　明未*・奥田　訓子**・茂木　俊彦***

Development of parenting resilience scale

Ono Akemi*, Okuta Noriko**, Mogi Toshihiko***

Abstract

Parenting Resilience Scale for mothers bringing up children was developed, its reliability and validity were confirmed, and characteristics of the structure of resilience were examined from the perspective of mothers' characteristics. Participants were mothers of school and kindergarten children（n＝866, average age＝40.19, SD＝4.45）. Exploratory factor analysis was conducted and the factor structure of the Parenting Resilience Scale was examined. The result indicated 28 items consisting of three factors: (1) parental skills, (2) social support, and (3) maternal feelings. The α-coefficient and correlation coefficient with existing scales showed sufficiently high values, and reliability and validity of the scale were also confirmed. As children grew up, parental skills scores increased; and conversely scores of social support were higher when children were smaller. It is suggested that in the future, psychological intervention should be conducted to strengthen parenting resilience of mothers bringing up children. Moreover, further studies should be conducted to verify the validity of the Parenting Resilience Scale.

Key words: parenting, resilience, parenting stress, parental skill.

問題と目的

子育てを子どもが自立するまでとするならば、子育ての期間は長く、精神的、身体的、経済的に負担が伴い、親役割を果たすことは容易なものではない。しかし、同じ子育て場面でもストレスと感じる人と、楽しみと感じる人の違いがある。子育てに伴うストレスには子どものパーソナリティや年齢、親自身のパーソナリティ、家族をはじめとして周囲との関係などの要因が大きくかかわっている。ストレスフルな状況やネガティブな出来事を体験しても、そこから立ち直りを導く心理的特性としてレジリエンスという概念が注目されている。Rutter（1985）は、逆境にもかかわらず良い適応をしている子どもの報告から、この個人が示す特性に注目してレジリエンスの概念を提唱した。Masten, Best, & Garmezy（1990）は、困難で脅威的な状況にもかかわらずうまく適応する過程・能力・結果のことをレジリエンスと定義している。すなわちレジリエンスとは脅威にさらされ一時的に心理的不健康な状態に陥っても、後には回復できるという心の特性に注目する概念である。

レジリエンスを構成する要因をMasten et al.（1990）は、（１）個人の気質、パーソナリティ、統制の所在などを含む「個人内資源」と、（２）家族、友人などからのソーシャル・サポート、モ

*　桜美林大学大学院国際学研究科（Graduate School of International Studies, J. F. Oberlin University）
**　YMCA健康福祉専門学校（Yokohama YMCA college of human services）
***　桜美林大学健康福祉学群（J. F. Oberlin University, College of Health and Welfare）
受稿2011.9.10　受理2011.11.29

デリングの対象となるような人物の存在といった「環境資源」の２つに大別している。またHiew（1998）は 、レジリエンスの構成要因として、「I have（外的サポート）」「I can（個人内の問題解決スキル）」「I am（内的強さ）」の３因子から構成されていると提唱している。このようにレジリエンスは、逆境を乗り越えて環境に柔軟に適応するための個人の内的特性のみならず、環境との相互作用を通して変化していく過程として捉えている（高辻, 2002）。

近年さまざまな領域や対象においてレジリエンスの概念を取り入れた研究が行われてきた。まず、子どものレジリエンス研究を概観してみると以下のような研究がある。Grotberg（1995）は14ヶ国からなる589名の子どもの横断的研究から、レジリエンスの高い子どもの共通要因を明らかにしている。共通のレジリエンス要因は、子どもの個人内要因（気質など）、子どもによって獲得される要因（問題解決能力、ソーシャルスキルなど）、そして子どもの周囲から提供される要因（サポートしてくれる家族や、家族以外の人など）から構成されている。石毛・無藤（2005）によると、大人へと移行する若い人のレジリエンスの発達には、周囲から提供される要因である親が重要な人物であると報告されている。また、城・小花和（2001）や小花和（2002）は、子どものレジリエンスには母親の心的ストレス程度と関連があることを報告している。そこで子どもたちのレジリエンスの発達が注目され、予防的な視点から子どもたちのレジリエンスを育てるための教育が取り組まれている（Bryan, 2005; Anthony, Alter, & Jenson, 2009）。親子の関係が良好であることは子どものレジリエンスによい影響を与えることが報告されているように（Gribble, Cowen, Wyman, Work, Wannon, & Raoof, 1993; 城・小花和, 2001）、子どものレジリエンスは、親や家族によって、また学校や社会によって強化される（Saundra, Wilfridah, & Dana, 2000）。このことから、子どものレジリエンスを育てるためには、教師などの大人にもレジリエンスの概念が適用されつつある（紺野・丹藤, 2006; 小原・武藤, 2005）。

子育て中の母親を対象にした研究も次第に増えている。国外のレジリエンスの研究に、適応的な子育ての心理的特性についての研究や（Barrister, & Noack, 2007; Travis, & Combs-Orne, 2007）、障害児を育てる母親や（Gerstein, Crnic, Blacher, & Baker, 2009; Horton & Wallander, 2001; Margalit, & Kleitman, 2006）、一人親の子育て（Taylor, Larsen-Rife, Conger, Widaman, & Cutrona, 2010）などのリスク要因のある母親を対象にした研究などを散見することができる。

子育ての心理的特性についての研究では、Baraiser & Noack（2007）は、母親のレジリエンスは、子育ての変化にうまくやっていく能力のことであるとし、母として忍従することと受容することの相反する両面感情を受け入れることであると説明している。Travis, & Combs-Orme（2007）は、子育て中の母親と自身の養育者との関係性が、現在の子育てにどのように影響するかを調査した研究から、養育者との絆が希薄である母親のうちに脆弱な子育てになる母親が存在する一方で、適応性のある子育てを行っている母親が存在することを明らかにしている。Travis, & Combs-Orme（2007）は、子育てのレジリエンスは、人生の課題に成功することや、困難にうまく対処すること、自分の子どもに良い子育てをすることを促すと報告している。成人期においても、養育者との希薄な関係性を克服し、適応性のある働きを発展させることができることから、Grotberg（2003）が提唱するように、レジリエンスは特別な能力や特性ではなく、誰もが保有し得るものとされ、どの年代の人でも伸ばすことができるといえる。

障害をもつ子どもを育てる母親については、定型発達の子どもの母親と比較して障害児の母親の

子育てストレスは高い。Gerstein, et al.（2009）は、それにも拘らず状況に十分に適応するというレジリエンスの側面を持ち合わせる親や家族がいることから、障害児の親のレジリエンンスには、親の個人の特性と、夫婦の質の高い関係性が関連することを明らかにしている。Tali（2002）は、知的障害、身体障害、学習障害の子どもの親を対象にした対処や将来の予測に関するインタビュー調査研究から、障害児を育てる親はレジリエンスが重要であることを示唆している。Margalit, & Kleitman（2006）は、レジリエンスを備えている母親は育児ストレスが低く、高い首尾一貫性の感覚や、強い家族のつながりが母親のレジリエンスに関連することを明らかにしている。Bucy（1996）は、発達に遅れやがある子どもや、行動に問題がある子どもをもつ母親を対象にした、母親のレジリエンスを促進することを目的としたプログラムは、子育てストレスの低減と家族支援に有用であることを報告している。しかし、発達障害の子どもや、里親など困難な状況にレジリエンスの概念を適応するだけでなく、通常の子育て支援にもレジリエンスの概念を適応することは重要である（Schwartz, 2002）。

レジリエンス研究は、深刻な状態に対する適応が取り上げられていたが、個人の日常生活に果たす役割についても検討する意義があることが指摘されている（Klohnen, 1996; 高辻, 2002）。具体的には、災害や虐待といった過酷な状況やネガティブイベントによる急性的なストレスだけでなく、生活にかかわる慢性的なストレスなどからの精神症状の発現に至ることもあるため、日々の生活で経験する不快な出来事や、ライフイベントから引き起こされるストレスフルな状況に対応する心理的特性としてレジリエンスが検討されている（石毛・無藤, 2006; 小塩・中谷・金子・長峰, 2002; 長内・古川, 2004）。

近年育児不安、育児ストレスや育児困難感といった子育てで生じる負の感情を扱った研究が多数報告されている。多様な環境の中で育児する母親の負担や不安に対して、地域社会での子育て支援体制の充実が求められている。また坂口（2007）は、母親の育児不安、育児ストレスの原因について様々な観点から検討しているが、単一の原因だけでは説明ができず、いくつかの要因が関連していると報告している。子育てストレスを考える上で、親という状況には独特の心理学的ストレスがあり、職場ストレスや対人ストレスなどの他の領域とは異なるストレスがあると考えられる（杉本, 2008）。子育ては決して放棄することが許されないことを考えると、そこから引き起こるストレスフルな状況に対応する心理的特性としてレジリエンスの概念を用いて検討することは意義があると考える。

なお、レジリエンスと類似した概念として、ストレス・コーピングと、ハーディネスが挙げられる。ストレス・コーピングは、ストレッサーを処理しようとして意識的に行われる認知的な行動及び思考である（Lazarus & Folkman, 1984）。ストレス・コーピングは、ストレス状況におけるストレス反応の抑制を目的とした対応の促進は説明されるが、その後にその状況から立ち直るという力動やその後の結果の説明は含まれていない（石井, 2009）。ハーディネスについては、ストレスが特に多いとされる管理職についた人の中に、重職のため病気になる人とそうでない人がいることに着目した研究である（Kobasa, 1979）。ハーディネスがストレッサーに挑戦する強さを表し、一方レジリエンスはストレスによる苦痛から立ち直る強さを表しており、2 者は違う概念である（石毛・無藤, 2005）。また、高辻（2002）は、レジリエンスは個人の内的な性格特徴としてだけでなく、個人のおかれた環境への適応プロセス全体も含めて包括的にとらえられている概念であると指摘している。子育て場面では、育児することで生じるストレッサーに立ち向かっていくというより、育

児することで生じる困難や問題に柔軟に対処し、育児に適応していることから、レジリエンスの方が育児ストレスに影響を与える個人内要因であると考える。

レジリエンスという概念は最近注目されたものであり、国内のレジリエンス研究の歴史は浅く、子育て中の母親を対象にした研究も数が少ない。親役割から生じるストレスとうまく付き合うのにレジリエンスは役に立つ。しかしBaraitser & Noacl（2007）は、母親のレジリンスの発達について扱った研究は少なく、母性としての重要な側面が取り扱われていないことを指摘している。Baraitser & Noacl（2007）は、子育てレジリエンスを母親が子育て体験の変化にうまく適応していく能力と定義しているが、本研究ではこの定義に依拠して検討していくとする。レジリエンスという概念を取り入れて母親を支援するときに、レジリエンスを測定する尺度が必要であるが、現在のところころ子育てに関するレジリエンスの尺度は存在しない。そこで本研究では、母親の子育てにおけるレジリエンスの構成要因を探索し、子育てレジリエンス尺度を標準化することを目的とする。

研究１

方　法

１）調査対象者と期間：調査は2010年２月～３月の期間、A県下B市内小学校２校の全児童の母親1123名を対象に、2011年７月A県下B市内幼稚園の母親230名を対象に、質問紙と回収用の封筒を配布し、幼児・児童の担任を通して回収した。有効回答866名、平均年齢40.19歳（*SD*＝4.45）であった。子どもの数の平均は1.99人（*SD*＝0.71）、家族の人数の平均は4.13人（*SD*＝0.99）であった。

２）手続き：尺度を構成するにあたって、２つの手続きを取った。まず一つ目の手続きは、これまでにおいて開発された尺度から、佐藤・祐宗（2009）の勤労成人用の「S-H式レジリエンス検査」尺度と、井隼・中村（2008）の「個人内資源の認知」と「環境資源の認知」の２つの下位因子と、石毛・無藤（2006）の下位因子「意欲的活動性（10項目）」「楽観性（３項目）」を、Grotberg（1995）やHeiw（1998）が提唱する「I have（周囲から提供される要因）」「I can（獲得される要因）」「I am（個人内要因）」に基づいて分類した。これらの項目から母親の子育てにおけるレジリエンスに適切と思われる項目を抽出した。この際、これら３つの既存のレジリエンス尺度は一般勤労者、大学生や中学生を対象に作成された尺度であるため、一部の項目は母親の子育て場面に即した表現に改めた。

二つ目の手続きは、児童期の子どもをもつ母親を対象にしてグループ面接を３回行った。対象にした母親は合計９名（平均年齢41.56歳、SD＝3.04）であった。「育児をするうえで感じる辛さ困難さを、どうやって乗り越えていくか」と教示し、得られた内容を逐語化した後、概念を抽出し項目を作成した。Grotbery（1995）やHiew（1998）が提唱する３つのカテゴリーの項目数がほぼ同じになるように調整しながら、既存尺度から抽出した子育て場面に対応した10項目と、グループ面接のデータをもとに作成した30項目を合わせて母親の子育てにおけるレジリエンス尺度として40項目を選定し、内容的妥当性の確認を行った。なお項目の作成、選定及び内容的妥当性の確認は、心理学を専門とする大学教員１名と大学院生４名によって内容分析によって行った。

回答選択肢は「そう思う（４点）」「ややそう思う（３点）」「あまり思わない（２点）」「全く思わない（１点）」の４段階評定で求めた。統計分析はSPSS for Windows 18を用いて行った。

３）倫理的配慮

調査協力者には、調査目的、個人情報の保護、自由意思での参加、及び不参加による不利益を被ることのないこと、調査結果を研究目的以外に使用しないことを文書により説明した。関係機関とは調査契約書を取り交わし、契約書には倫理的配慮について記載した。本研究は、大学研究倫理委員会の承認を得た。

結　果

1）因子構造の検討

得られたデータの逆転項目を整理し、各項目得点の平均値と標準偏差を求めたところ、天井効果が見られたが、因子構成に必要であると判断し、削除しなかった。母親の子育てレジリエンス尺度の全40項目について最尤法、斜交プロマックス回転による探索的因子分析を行った。ガットマン基準に基づき固有値1.0で因子数を決定した結果、固有値の減衰状況は、9.88、2.43、2.13、1.77、1.35…というものであった。また因子の解釈可能性を考慮して、3因子として解釈するのが妥当と判断した。因子負荷量が.39未満の12項目を除外し、残りの28項目に対して因子分析を行った。

各因子に含まれる項目の特徴から、第Ⅰ因子（11項目）を、子どもに対して適宜に対応する能力や、家庭生活を支える上で必要な家事をこなす力に関する項目から「ペアレンタル・スキル」因子、第Ⅱ因子（9項目）を、周囲の人からの子どもの評価や理解を得るなど周りからのサポートにかかわる項目を含んでいるので「ソーシャル・サポート」因子、第Ⅲ因子（8項目）を、母親として自分自身を肯定的に受け入れて、子どもや家族との関わりを楽しんでいる項目から「母性感情」因子とし、母親の子育てレジリエンス尺度とした（Table 1）。

2）内的整合性による信頼性の検討

尺度の信頼性については、尺度全体および下位尺度（ペアレンタル・スキル、ソーシャル・サポート、母性感情）ごとにCronbachのα係数を算出し内的整合性について検討した。「子育てレジリエンス尺度全体」のα係数は.91、「ペアレンタル・スキル」α係数は.84、「ソーシャル・サポート」α係数は.84、「母性感情」α係数は.81であり、いずれも.80以上あり、信頼性が高いことを示している。

3）属性による子育てレジリエンスの検討

母親の年齢、第一子の子どもの年齢、子どもの数と家族形態等の属性によって子育てレジリエンス得点に差がないか検討した。母親の平均年齢40.19歳を基準にして±1SD（SD＝4.44）を算出し、34歳まで、35から39歳、40から44歳と45歳以上の4群の因子得点の平均値を比較したところ、「ペアレント・スキル」において群間の得点差が有意であった（$F(3,832)=3.13$, $p<.05$）（Table 2）。多重比較を行ったところ、45歳以上の群と35から39歳の群との間と、45歳以上の群と40から44歳の群との間に有意な得点差がみられた。45歳以上の群が高得点であった。その他の項目において有意差は認められなかった。

次に第一子の子どもの年齢を就学前の6歳まで、7歳から8歳、9歳から12歳と中学以上の13歳以上の4群に分けた。子どもの年齢区分を、9歳に設定した。9歳の頃という時期は、「9歳の壁」と言われる時期であり、子どもにとって思考の発達が著しい時期である。そして落ちこぼれる時期でもある（稲葉・菅原・押切・木村・八木一平＆八木一正, 2007）。子どもの学業のつまずきは、子育てにも少なからず影響すると考えられるため、小学生を8歳までと、9歳からの2つに区分した。子どもの成長によって母親のレジリエンス得点が異なるかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。「ペアレンタル・スキル」において群間の得点

Table 1　子育てレジリエンス尺度の因子分析結果　　最尤法　プロマックス回転　N＝866

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第Ⅰ因子　ペアレンタル・スキル（α＝.836）			
子どもに対して柔軟に対応することができる	.798	−.126	.031
子育てをするのに腹がすわっている	.714	−.045	−.047
子どもに大変なことが起きても楽観的に考えることができる	.618	−.017	−.107
いちどに多くのことをやりこなすことができる	.559	−.005	−.124
何があってもいつものように家事をこなすことができる	.549	−.132	.002
子どもに関する問題が起きても，なんとか解決することができる	.534	.015	.121
子育ての空いた時間を有効に使うことができる	.525	.122	−.073
苦手な人でもその人に合わせて付き合うことができる	.476	.137	−.061
親としてはじめての人でもすぐに親しくなれる	.465	.239	−.133
子どもの特性を尊重している。	.443	−.027	.220
この子を一人前に育てることができる	.425	−.017	.257
第Ⅱ因子　ソーシャル・サポート（α＝.840）			
子どもの悩みを話せる人が家族以外にいる	−.114	.830	−.116
子どものことを気軽に話せる友人がいる	−.076	.803	−.126
子どもに関する情報をくれる人がいる	.006	.626	.019
家族以外にもわが子のことを気にかけてくれる人がいる	−.064	.611	.139
家族以外に子どものことを評価してくれる人がいる	.054	.512	.119
親としてお手本にしたい人がいる	.017	.440	.040
近隣の親たちとうまく付き合うことができる	.285	.430	.016
母として頑張っている自分を理解してくれる人がいる	.136	.401	.177
自分を見守ってくれている大きな力がある	.039	.394	.180
第Ⅲ因子　母性感情（α＝.810）			
子どもは私にとってかけがえのない存在だ	−.175	−.093	.854
子どもをかわいいと思える	−.107	−.076	.799
子どもを授かったことに感謝している	−.161	.091	.712
子どもや周りからお母さんといわれることがうれしい	.015	.045	.452
子どもを育てることで自分も成長していると実感する	.144	.066	.442
子育ての困難は自分にとって意味があり，成長させてくれる	.087	.175	.440
子どもとの会話を楽しむことができる	.286	−.003	.433
家族と過ごす時間を大切にしている	.170	−.014	.429
寄与率(%)	29.617	37.022	43.906
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
因子相関行列　第Ⅰ因子	—	.603	.573
第Ⅱ因子		—	.550
第Ⅲ因子			—

差は１％水準で有意であった（$F(3,861)=4.89$, $p<.01$）。「ソーシャル・サポート」において群間の得点差は有意傾向であった（$F(3,86)=2.50$, $p<.10$）（Table 3）。多重比較の結果から、「ペアレンタル・スキル」で、第一子が中学生以上の群と６歳以下の子どもの群の間に有意差がみられ、中学生以上の群が高得点であった。

子どもの数を一人、二人、三人以上の３群に分けて比較したところ有意差は認められなかった。核家族（家族数3.91人, $SD=0.78$人）と拡大家族（5.50人, $SD=1.17$人）では、拡大家族の「ペアレンタル・スキル」得点に有意差傾向が確認された（$t=2.14$, $p<.10$）。子育てに柔軟に適応する力は、年齢を重ねるだけではなく、子どもの成長が関係していることが示唆された。一方母親の子育てレジリエンスは子どもの数に関連がなく、単純に子どもの数の増加に伴って獲得するものではないことが言える。これらのことから「ペアレンタル・スキル」の獲得には、家族の多様な環境が影響を与えると推測される。

研究２

目　的

研究２では子育てレジリエンス尺度の構成概念妥当性を検証するために、子育てストレス尺度と、育児負担感指標、特性的自己効力感尺度と精神的健康度（GHQ-12）との関連を検討した。

Table 2　母親の年齢別　各項目の平均と標準偏差　及び分散分析の結果

	34 歳まで (*N*=77)		35－39 歳 (*N*=287)		40－44 歳 (*N*=331)		45 歳以上 (*N*=137)				
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*F* 値		多重比較
ペアレンタル・スキル	2.82	.46	2.81	.48	2.81	.44	2.94	.43	3.13	*	40~44＜45*, 35~39＜45*
ソーシャル・サポート	3.38	.46	3.35	.50	3.27	.48	3.36	.44	2.06	*n.s.*	
母性感情	3.61	.39	3.63	.37	3.61	.40	3.67	.31	.69	*n.s.*	

†p＜.10, *p<.05, **p<.01
N=832

Table 3　第一子の子どもの年齢による母親のレジリエンス得点の比較

	6 歳まで *N*=61		7 歳－8 歳 *N*=156		9－12 歳 *N*=406		13 歳以上 *N*=236				
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*F* 値		多重比較
ペアレンタル・スキル	2.75	.44	2.77	.47	2.81	.45	2.92	.45	4.89	**	6 歳まで＜13 歳以上 **
ソーシャルサポート	3.41	.48	3.38	.45	3.29	.50	3.31	.46	2.17	†	
母性感情	3.59	.36	3.65	.38	3.62	.37	3.62	.38	.49	*n.s.*	

†p＜.10, *p<.05, **p<.01
N＝859

方　法

1）調査対象者の属性と手続き：幼稚園から中学校の子どもをもつ母親106名を対象とし、平均年齢は37.43歳（*SD*＝3.93）、子ども数は1.90人（*SD*＝.69）であった。

2）使用尺度：育児負担感指標（中嶋・斎藤・岡田, 1999）：「自身の社会的役割活動に関する制限感」「児に対する拒否感情」「育児に伴う経済的逼迫感」「育児に対する拒否感情」の 4 因子で構成されている。「まったくない」「たまにある」「ときどきある」「しばしばある」「いつもある」の 5 件法、得点が高いほど育児にストレスを感じている。特性的自己効力感（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995）：男女・年齢を問わず様々な場面で使用できる尺度であることから、育児における効力感を測る尺度として妥当であると判断した。「そう思う」「まあそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 5 件法、得点が高くなるほど自己効力感が高いことを示している。精神的健康度の日本版GHQ-12項目短縮版（中川・大坊, 1985）：ストレス状態を測定する尺度の一つとして広く活用されている。 4 段階で回答を求め、得点が高いほどストレスを感じており精神的健康度が低いことを示している。

子育てレジリエンス尺度と各尺度との関係は、子育てレジリエンス尺度の妥当性の観点から以下のように予測した。先行研究からレジリエンスの高い母親は育児ストレスが低いことが明らかにされている（Margalit, & Kleitman, 2006; Gerstein, et al, 2009）。本研究でも育児負担感とは負の相関を示すと予測される。Rutter（1987）は、レジリエンスには自己効力感の確立と維持する機能があると述べている。「母性感情」には母親としての自信や誇り含む要素から構成されており、自尊感情は子育てレジリエンスの構成要素の一つである。自尊感情は本人自身の価値に関する感覚であるのに対して、自己効力感は、ある行動をうまく行うことができるかという個人の確信を意味する。母親として価値があると感じていることは、育児の行動をうまくやっているための基盤であるとすると、「母性感情」は自己効力感と正の相関を得ることが予測される。石毛・無藤（2005）は、レジレエンスを困難な出来事を経験しても個人を精神的健康へと導く心理的特性であるとして、レジリエンスが

ストレス反応抑制に影響が大きいことを示している。本研究でも精神的健康度と負の相関を示すと予測される。

結　果

構成概念妥当性は、研究１における子育てレジリエンス尺度と、育児負担感指標、特性的自己効力感尺度、精神的健康度尺度（GHQ-12）との相関係数により検討した（Table.4）。子育てレジリエンス尺度の全ての下位因子と育児負担感との相関係数は、r＝－.36～－.48の弱いから中程度の負の相関がみられた。自己効力感との相関係数は、r＝.40～.73の中程度から強い正の相関がみられた。精神的健康度との相関は、r＝－.33から－.57の弱いから中程度の負の相関がみられた。

考　察

尺度の信頼性と妥当性について

本研究の目的は子育て中の母親に特化したレジリエンス尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。先行研究から子育てレジリエンスとして「I am」「I have」「I can」の３つの構成要素を仮定し、尺度を構成した。探索的因子分析から子育てに柔軟に、楽観的に対応する能力や、家事を効果的にこなす能力である「ペアレンタル・スキル」、周囲の人から子どもの評価や理解をえることができ、また子育てに理解をしてくれて、子育てに関することを話題にできる人がいる「ソーシャル・サポート」、母としての自分と子どもの存在を受け入れている「母性感情」の３つの因子を見出した。各下位因子と尺度全体のα係数の分析から、子育てレジリエンス尺度は高い内的整合性を示すことが確認されたことから、概ね信頼性が認められたといえる。

次に構成概念妥当性検討について考察する。育児負担感指標との関係では、予測と一致した負の相関を示し、先行研究のレジリエンスの高い母親は育児ストレスが低いことを支持する結果であった（Margalit, & Kleitman, 2006; Gerstein, et al, 2009）。特性的自己効力感との関係では、予測と同じ方向の正の相関を得た。精神的健康度との関係でも、同様に予測と同じ負の相関を見いだした。

子育てレジリエンス尺度は、既存の尺度と一定の相関を確認することができ、構成概念妥当性は支持され、妥当性を持つ尺度であると考える。

国外の先行研究から母親のレジリエンスは、母親が子育て体験の変化にうまく適応していく能力であり（Baraitser & Noack, 2007）、レジリエンスを持ち合わせている母親は、家族のつながりが良好であることが明らかにされている（Margalet & Kleitmn, 2006）。またTravis & Combs-Orme（2007）は、レジリエンスを備えた母親を、子育てを適応的におこない、子育ての役割に苦しめられることや子どもとの交流に不満がなく、子どもを扱いにくいと考えていないと報告している。これらの先行研究を踏まえれば、子育てレジリエンスは、個人の特性や性格などの内的資源と子どもや家族を

Table 4　子育てレジリエンスと各尺度との相関係数　N＝106

	第一因子 ペアレンタルスキル	第二因子 ソーシャルサポート	第三因子 母性感情	育児負担感	自己効力感	精神的健康度
第一因子 ペアレンタルスキル	1	.64**	.55**	−.41**	.73**	−.57**
第二因子 ソーシャルサポート		1	.57**	−.36**	.48**	−.43**
第三因子 母性感情			1	−.48**	.40**	−.33**
育児負担感				1	−.36**	.62**
自己効力感					1	−.53**
精神的健康度						1

**p<.01

はじめとする周囲の人との関係などの環境資源で構成されており、本研究の子育てレジリエンス尺度の下位尺度は、先行研究を支持すると考える。

尺度作成過程で得られた今後の示唆

母親の属性からレジリエンスの構成の特性を検討したところ、今回の調査から、第一子の子どもの年齢が13歳以上の母親と、母親の年齢が45歳以上の「ペアレンタル・スキル」得点が高かったが、子どもの人数の差によって得点に有意差が確認できなかった。このことからレジリエンスは、子どもの人数が増えることに伴う子育て経験の量の増加が原因で獲得するものではなく、子どもの成長と共に多様な子育てを経験することで獲得すると考えられる。一方「ソーシャル・サポート」は母親の年齢の群間に差が認められたが、年齢の増加に関連は認められなかった。多くの支援してくれる資源を所有するということと同様に、それら資源をどれだけ有効に活かすのかという実際の行動力も重要であると示唆していうように（井隼・中村, 2008)、環境資源を活かすには年齢によらない要因が関係することが推察される。

家族形態による特徴としては、拡大家族の母親は核家族の母親と比較して「ペアレンタル・スキル」得点が有意に高かったが、「ソーシャル・サポート」得点と「母性感情」得点においては群間で差が確認されなかった。このことから拡大家族は成員間の人間関係が核家族に比べて複雑化するため、対人関係や家事において柔軟に対応することが求められることが多いと考える。これらのことから、社会的スキル能力である「ペアレンタル・スキル」は、学習することが可能で、発展させることができると推察される。

「ソーシャル・サポート」は、母親の年齢の群間では得点に差を確認できなかったが、第一子の子どもの年齢の群間で有意傾向を認めることができた。子どもの年齢が 6 歳以下の母親が最も得点が高く、次に 7 歳、 8 歳の子どもの母親の得点が高い結果であった。子どもが幼稚園や、保育園に在園中は、子どもの送迎時に教諭や保育士と会話する機会や、子どもを通じた友人や知人との交流の機会が得やすいことから、自然と子育ての情報や支援を獲得しやすいことが予想される。しかし、子どもが小学生になると学校教師と会話する機会や、子どもを通じた友人や知人との交流の機会が次第に減っていき、周囲からの支援が得られにくいことが推察される。現代は子育てを取り巻く環境が変化して、地域社会の子どもを育てる力が弱くなっていることから、地域社会からの子育て支援が得られにくい。これらの子育て環境の現状を踏まえて母親のレジリエンスを高めるには、子どもの成長とともに減少しているソーシャル・サポートを手厚くすることで、「ペアレンタル・スキル」を更に強化できると考える。そのためには、子どもの成長とともに減少している子育てについて話をする場を意識的に提供していくことが、子育て支援の施策として有効であると考える。今後の課題としては、子育て中の母親を対象にした子育てレジリエンスを強化する子育て支援プログラムを実施して、支援プログラムの実証が求められる。

文　献

Anthony, E. K., Alter, C.F., & Henson, J. M.（2009）. Development of a risk and resilience-based out-of-school time program for Children and Youths. *Social Work*, **54**, 45-55.

Baraitser, L. & Noack, A.（2007）. Mother courage: Reflections on maternal resilience. *British journal of psychotherapy*, **23**, 171-188.

Bryan, J.（2005）. Fostering educational resilience and achievement in urban schools through school-family-community partherships. *Professional School Counseling*, **8**, 219-227.

Bucy, J. E.（1996）. An exploratory study of family rituals, parenting stress and developmental delay in early childhood. *Humanities and Social Sciences*, **57**（2-A）, 575.

Gerstein, E. D., Crnic, K. A., Blacher,J., & Baker, B. L.（2009）. Resilience and the course of daily parenting stress in families of young children with intellectual disabilities. *Intellectual Disability Research*, **53**, 981-997.

Gribble, P. A., Cowen, E. L., Wyman, P. A., Work, W. C., Wannon. M., & Raoof, A.（1993）. Parent and child views of parent-child relartionship qualities and resilient outcomes among urban children. *Child Psychol Psychiat.,* **34**, 507-519.

Grotberg, E. H.（1995）. A guide to promoting resilience in children: Strengthening the human spirit. *early childhood development: Practice and reflections*, **8**, Bernard van Leer Foundation,

Grotberg, H. E.,（2003）. What is resilience? In E. H. Grotberg（Ed）, Resilience for today: Gaining strength from adversity. Westport, Connecticut: Praeger Publishers. pp. 1-29.

Hiew,. C. C.（1998）. *Child resilience*: Conceptual and evaluation issues. In Proceedings of the 23rd Child learning forum, Osaka, Japan. 21-24.

Horton, T. V., & Wallander, J. L.（2001）. Hope and social support as resilience factors against psychological distress of mothers who care for children with chronic physical conditions. *Rehabilitation Psychology*, **46**, 382-399.

井隼経子・中村知靖（2008）. 資源の認知と活用を考慮したresilienceの4側面を測定する4つの尺度　パーソナリティ研究, **17**, 39-49.

稲葉悠季・菅原身奈・押切志郎・木村真一・八木一平・八木一正（2007）. 物理教育“9歳の壁”　物理教育, **55**, 268-271.

石井京子（2009）. レジリエンの定義と研究動向　看護研究, **42**, 3-14.

石毛みどり・無藤隆（2006）. 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連　パーソナリティ研究, **14**, 266-280.

石毛みどり・無籐隆（2005）. 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートの関連―受験期の学業場面に着目して―　教育心理学研究, **53**, 356-367.

城　仁士・小花和Wright尚子（2001）. 幼稚園における幼児と母親を対象とした災害ストレス・マネジメント支援　神戸大学都市安全研究センター　研究報告, **5**, 237-250.

Klohnen, E. C.（1996）. Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Personality and Social Psychology*, **70**, 1067-1079.

Kobasa, S. C.（1979）. Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1-11.

紺野祐・丹藤進（2006）. 教師の資質能力に関する調査研究　―「教師レジリエンス」の視点から―　秋田県立大学総合科学研究彙報, **7**, 73-83.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治（2002）. ネガティブな出来事から立ち直りを導く心理的特性　カウンセリング研究, **35**, 57-65.

Lazarus, R. S., & Folkman, S.（1984）. *Stress, appraisal, and coping,* Springer Publishing Company: New York.（本明寛　春木豊・小田正美（監修）1991　ストレスと心理学―認知的評価と対処の研究―実務教育出版）

Margalit, M., & Kleitman, T.（2006）. Mothers' stress, resilience and early intervention. *European Fournal of Special Needs Education*, **21**, 269-283.

Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N.（1990）. Resilience and development: Contributions from the study of children who overcame adversity. *Development and Psychopathology*, **2**, 425-444.

中川泰彬・大坊郁夫（1985）. 日本版GHQ精神健康調査票〈手引〉 日本文化科学社.

中嶋和夫・齋藤友介・岡田節子（1999）. 母親の育児負担感に関する尺度化 厚生の指標, **46**, 11-18.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子（1985）. 特性自己効力感尺度の検討―障害発達的利用の可能性を探る― 教育心理学研究, **43**, 306-314.

小原敏郎・武藤安子（2005）. 「保育の質」と「レジリエンス」概念との関連 日本家政学会誌, **56**, 643-651.

長内綾・古川真人（2004）. レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **7**, 28-38.

Rutter, M.（1985）. Resilience in the face of adversity: Protective factors and resilience to psychiatric disorder. *British Journal of Psychiatry*, **147**, 598-611.

Rutter, M.（1987）. Psychosocial resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 316-331.

坂口由紀子（2007）. 母親の育児ストレスに関する研究の動向 教育学研室紀要：「教育とジェンダー」研究, **7**, 75-82.

佐藤琢志・祐宗省三（2009）. レジリエンス尺度の標準化の試み 看護研究, **42**, 45-52.

Saundra, M. N., Wilfridah, M., & Dana, J.,（2000）. Understanding resilience: The role of social resources. *Journal of Education for Students Placed at Risk,* **5**, 47-60.

Schwartz, J. P.（2002）. Family resilience and pragmatic parent education. *The Journal of individual Psychology*, **58**, 250-262.

杉本令子（2008）. 育児ストレス・育児ストレス・コーピングに関する研究動向 日本女子大学大学院人間社会研究紀要, **14**, 133-14.

Tali, H.（2002）. Parents of Children with disabilities: Resilience, coping, and future expectations. *Journal of development and Physical disabilities*, **14**, 159-171.

高辻千恵（2002）. 幼児の園生活におけるレジリエンス尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討 教育心理学研究, **50**, 427-435.

Taylor, Z. E., Larsen-Rife, D., Conger, R. D., Widaman, K. F., & Cutrona, C. E.（2010）. Life stress, maternal optimism, and adolescent competence in single mother, African American families. *Journal of Family Psychology*, **24**, 468-477.

Travis, W. J., & Combs-Orme, T.（2007）. Resilient parenting: Overcoming poor parental bonding. *Social Work Research*, **31**, 135-149.